

夕顔の門

吉川英治

青空文庫

十九の海騒うみざい

一

『はてな。……閉めて寝た筈だが』

と、若党わかとうの楠平くすへいは、枕まくらから首くびを擡もたげて、耳みみを澄すました。

——風かぜが出て来きたらしい。

海うみが近いので、庭木にわぎには潮風うしほが騒さわめいている。確かに、寝ねしな
に閉しめたとばかり思おもっていた庭木戸にわぎとの扉とが、時折ときとき、ばたん——ば

たん——と大きな音を立てている。

楠平は、手燭を灯つけた。そして揺れる灯を庇かばいながら、庭へ出て行つたが、主人たちの住む南側の母屋を見て、眼を恟すくめた。

『あつ、お市いち様の部屋が開あいている？』

口走りながら、楠平はそこへ寄つてみた。雨戸が二尺ほど開いているし、縁の内をそつと覗のぞくと、暗くてよく分らぬが、何か取乱れている気配がする。

『——お嬢様、お嬢様』

ふた声ほど呼んでみた。

返辞はない。

楠平はすぐ、はつと或る予感の的中を思つて、体が顫おのいた。

明日は、家中の人、曾我部兵庫へ嫁ぐというので、きょうも一

日、曠はれの荷物や、何かの支度に、忙せわしく暮れたこの部屋だった。

『旦那様つ、旦那様つ。——お嬢様のお部屋が開いておりますが。そして、お嬢様のお声もしませぬが』

雨戸の外から、主人の寢所をたたいて彼が告げると、

『なにつ、娘が居ないと？』

田丸惣七たまるそうしちの夫婦は、匆はね起きたらしく、遽にわかに家の内には、狼狽する気配が聞かれた。

娘のお市の行状つひに就ては、田丸惣七夫妻も、薄々は一抹の気懸りを抱いていたものとみえて、

『さては、格かくのしん之進そそのめに唆そそのかされて、明日あしたを前に、立ち退いたも

のとみえる。……不！ 不埒者めが！』

と、狼狽の中に、惣七の怒りの声が洩れたと思うと、聽て、

『おまえが悪い。女親として、知らずにおる事があるものか』
と、彼女の母親を、恐しい声で叱りとばした。

——わつと、泣き伏す声をした。お市の母が悔い泣くのである。
その泣き声を、惣七は又叱りながら、

『ば、ばかめ！ 泣いていて済む場合か。遺書を見い、上方へ行くとある。わし達が寝む迄は、何の気振も見えず、この部屋の灯影に姿が見えた彼奴だ。——差しずめ、一刻も早く、手配をするのが肝要じゃ。まず齋地どのへ報らせに行け。岡村へも、野坂へも。——早く、早く』

——まだそう遠く迄は走っていない。

それに夜半よなかは、浜から出る船はない筈だから、足どりも、山越えを指して行つたに違いない。

楠平は、自分の若党部屋へもどつて、慌あわただしく身支度をする間に、そう考えた。

『旦那様。ひと足先に、てまえが追いついて、お嬢様を抑えて置きますから、お後からすぐ』

出がけに、外から云うと、惣七は、窓から顔を見せて、

『楠平か、楠平か』

『はい。はい』

『よく気がついた。早く行つてくれ。——浜ではないぞ。道どりは山の方らしい』

『てまえも、そう考えます』

『わし等も、手配をして、すぐ後あとから行く程にな——』

楠平はもう外へ駈け出していた。主人のおろおろした声が耳に残つて、いつまでも心が傷いたんだ。

中津の城下は、もう何処も寝しずまっていた。小笠原家八万石のお城にも、ポチと小さい灯が仰がれるだけだった。

道は、山国川の流れに添つて行く。町から離れ、村から遠去か

るに従つて、登りにかかった。

宇佐^{うさ}まで六里。小倉まで十五里半。

^{とうげ}

峠の追分まで来て、ほつと楠平が汗を拭つていた時である。もう戸を閉^たてて人氣もない筈の山茶屋の陰から、人影が二つ——寄り添^{あな}つて彼方へ行くのが見えた。

『あつ？ ……やっぱり相手は格之進』

楠平は、覺られないように、身を屈^{かが}めて追いかけた。

もう一人の方は、紛れもない主人の娘の——お市であつた。

『お待ちなさいつ。——お嬢様、格之進様つ』

不意に馳^{ふたり}け寄つて、楠平は、男女の袂をつかまえた。

男女は吃驚^{びっくり}して、彼の手を振払ったが、楠平は先へ廻つて、道に立ち塞^{ふさ}がった。

『何とした事です。お嬢様もお嬢様なら、格之進様も又、武士にあるまじき為され方。——さ、お帰りなさいませ』

『……………』

若い男女は、恟^{すく}んだまま、楠平の甲^{かん}だかい声に、顔いろを顫^{おの}かせていた。

『今のうちにお帰りなされば、誰もまだ知らぬ事、お嬢様も傷がつかず、格之進様も御無事で済みましようが。……おふたりの仲

は、楠平も以前から、薄々はお察し申しておりましたが、お嬢様には、親御様のお口から、嫁に遣やらうと誓った歴れつき乎とした良人おっとのある身。——それを、明日あしたは御婚礼という今夜、こんな事を遊あばしては、親御様のお立場は何うなりましようぞ』

——すると、それまで黙っていた深見格之進は、

『これ楠平。若党の分ぶんざい際で、いらざる事に出洒張でしゃばるな。もう御城下を出奔したからには、男女ふたりの恋は命がけ、ここは二人が、恋に勝つか死ぬかの峠だ』

『では、何うあつても』

『知れたこと！』

『……でも、お嬢様は、よもや御両親を苦境に捨てて、後は何う

でもなれというお考えでは御座いますまい。口の巧い、容貌かおだちの美しい男に限って軽薄なもの。——永ゆい行ゆく末すえに、御後悔をなされますなよ』

『おのれ、今の言葉は、誰を指して？ ——』

と、格之進は不意に刀を抜いて、楠平の横顔へ斬りつけた。

楠平は、わつと両手で顔を抑えながら五、六歩ほど蹠よろめいた。

そして一度は、腰をつきかけたが、血を浴びた刹那せつなに、彼にも

武士の性根ほっせんが勃ぼつ然ぜんと眼を醒さまして、

『もうこの上は！』

と、刀を抜合せて、烈しく斬返して来た。

格之進は、彼の鋭い切っ先を、何度もかわしながら、彼の弱る

のを待つて、滅多斬りに刀で撲なぐつた。

お市は、自分の幼い時から、背にも負われ、手にも抱かれた召使なので、さすがに面おもてを向けていられなかつた。

『——もう、もう、止してください。格之進様つ。止して下さい。』

……あつ、誰か彼方むこうから人が来ました。はやく此処を』

『えつ、追手が来た？』

彼女のことばに度を失つて、格之進は血刀を提げたまま、お市の走るのに尾ついて駈け出した。

だが、その翌々日、男女ふたりは、門司もじから赤間あかまの関へ行く便船の中で、追手の者に、捕まつてしまった。

然し、連れ戻されたのは、お市だけで、男の深見格之進は、島

の多い海峡の瀬戸口で、追手の隙を見て海へ飛びこんでしまった。勿論、この事は、田丸家の内輪の者だけで、極秘にされ、お市の婚礼は、急病という態ていで、延期された。

若党の楠平は、重傷だった。けれど生命いのちだけは取止めたので、彼の義兄で、身分の低い同藩の侍——尾形周蔵を呼んで、懇篤こんとくに引き渡した。

その後、半年以上も過ぎて、お市の結婚は、極めて質素そがべひようごに執り行われた。——かねて正当な婚約のあつた同藩の曾我部兵庫が、その日からの彼女の良人であつた。

×

×

×

×

享保二年から八年までの歲月は、またたく流れた。

十九の年の過あやまちも、六年前の夢となつて、お市は今なお水々しい二十五の御新造ごしんぞぶり、良人の曾我部兵庫は、四十近い寡かもく黙な侍であつた。そして明けても暮れても、静かな海うみざい騒と、長閑な陽のどかあたりほかの他、何事もない城下町では、この一家庭も、勿論、平和に見えた。ただ夫婦の仲に、子がないだけが淋しく思われる位なものであつた。

一 詫たの妻

七夕も近い——夏の或る日の黄昏たそがれだった。

お市は、ぽつねんと、雑草に委されている庭に立って、夕方の星を仰いでいた。まだ、外も、窓も、仄明るかった。

『お市っ。——鷹たかはどうした？』

良人の書齋から、兵庫の声が、その姿へ、鋭く投げられた。

『……………』

星を見ていたお市の眼は、そこらの木を梢から梢へ移されたが、良人の方は見もしなかった。

『……居りません』

と、冷ややかに云つたのみで。

兵庫は、書き物に疲れた眼をあげて、筆架ひっかへあらく筆を擱おいた。彼の周りは、書物に埋つていた。

伸びるままに委せてある庭の雑草のように、彼の身のまわりも、独り者のように、散らかつて、塵ちりが積つていた。

『居ない？ ……。それは当り前だ。そんな所に立つた儘、庭木を見ていた所で、見える筈はない。外を歩いて探して来い』

『………』

彼女は然し——その立つている所から動かなかつた。

今し方、良人に代つて、鷹小屋の中へ這入つて鷹へ餌えをやる時、

過まつて、鷹を逃がしてしまつたのである。

鷹の糞ふんだの、羽虫はむちのにおいだのがして、その中へ這入ると、彼女はいつもむつとする。だから彼女は鷹が嫌いであり、鷹に不親切であつた。

飼ひ馴れている鷹であるから、本来逃げる筈のものではないが、彼女の姿を見ると、鷹も怒いかるのであつた。過失あやまちの因もとは、そこにあつた。

それを良人の兵庫は、叱りはしなかつたが、

(探して来い)

と、先刻さつきから云つていたのであつた。

(馴れた者が、口笛をふくなり、手をあげて呼べば、鷹は拳こぶしに降

りてくる。おまえも、鷹匠の妻ではないか)

とも云うのである。

だが——彼女はその命に従がえなかつた。

星を見ていた……。

ここに居ない、遠くの人が思い出された。

そして現在の自分に、ほろほろと理由なく泣けて来る——

『まだ其処に居るかっ』

兵庫の声は、烈しくなつた。

『もう年老いて、猟には使えぬ古鷹だが、年来、わしが餌飼えいして来た鷹だ。それに人に馴れ過ぎているので、この家を離れれば、すぐ心ない童わらべたちに捕まるか、猟師に撃ち殺されてしまうだろう。

——余り暗くならぬうちに、早く見つけて来い』

『……御無理です』

『なに、なぜわしの吩咐いいつが無理か』

『女などに、鷹を捕まえて来いなどと仰つしやっても』

『其方そちが逃がしたのではないか』

『逃がしたから、その咎とがを責めて、困らしてやろうというお考えですか』

『誰が、妻の困るのを見て嬉ぶものがあるうぞ。そなたも鷹匠の妻でないか、もう五、六年も朝夕わしのする事は見て手心も知つている筈。——今渡した鷹笛をふいて、彼方あなた此方こなたと、庭木の多い屋敷を歩いて居れば、きつと鷹が聞きつけて降りて来る』

『……そ、そんな、見ツともないことが』

『何が見ツともないのか』

『御自身で探していらつしやれば、よいではございませぬか』

『十日以内には返上すると約束して、他家から拝借した「放鷹ほうよう故実こじつ」を、こうして今、懸命に写しておるので手が離せぬ。：

：アア行燈あかりもまだ灯ついていないの。燈ひの用意はわしがするから、さがして来い、鷹を探して来い』

すぐ側にある行燈を引き寄せたが、掃除の届かない油皿ちりにも塵ちりが溜たまりっていて、付木の火を移すと、バチバチと火花が芻はねた。

いつのまにか、お市の姿は、庭から消えていた。

鷹を探しに外へ出て行ったものとはばかり思つて、兵庫は又、机に屈かがみこんでいたが、ふと、彼女の部屋に物音がするので顔をあげてみると、お市が鏡台に向つて、いつもの夕化粧をしている姿が、萩戸を透かして見えた。

『居るのかツ、未だ！』

こう呶鳴ると、彼は無意識に、机の上の物を掴んで、彼女の部屋へ抛りつけた。

それは、朱墨しゆずみを卸おろす丸まる硯すずりだった。萩の簀戸すどを突き破つた硯は、箆筒たんすにぶつかつて、彼女の坐っている側に躍おどつた。

『——今、行きかけている所です』

お市は、見向きもせず、櫛の手をうごかしていた。くわつとした兵庫も、彼女の声の底に、何日いつにない冷たさと落着きぶりを感じたので、黙って、見まもっていた。

——次に、お市は箆筒を開けていた。閉めたり開けたりする抽ひ斗きだしの環かんの音がだんだん荒つぽくなる。

着物を更かえ、帯を締め、そして何か手廻りの物を包み初めた様子に——兵庫は、

(又、始まったな)

と、覚さとつて、舌打した。

『……お話がございませうが』

と、彼女は、改まって、良人の前へ来て坐った。

『……なんだ』

『お暇ひまをくださいまし』

『………』

『貴方あなたは、妻よりも、鷹の方が可愛いお人なんですから』

『………』

『この部屋も、鷹の書ほんでいっぱい。家の中も鷹の抜毛や餌でいっぱい。何処を向いても鷹臭いほどです。——貴方がいちばん御機嫌のよい時は、餌をやりながら、鷹と独り言に話しをしている時でしょう。——鷹になさる程な優しい顔を、妻にはした事のない貴方です』

『わしは、藩の鷹匠だ、書物を見るも、鷹を飼うも、わしの天職——わしの御奉公。——当りまえな勤めではないか』

『ですから、わたくしは、此家を去つて参ります。どうか、お暇を下さいまし』

『易い事だ。……おまえが来てからも、この家の行燈の灯皿には、いつも虫の死骸や塵が沈んだままだ。居ても居なくても、何の変りはない』

『よ、ようござんすね。……では』

『だが、待て』

『御未練ですか。武士のくせに』

『はははは。——イヤそう思つて居てもよい。其女そなたの出て行く出

て行くもこれで何度か』

『はい、今日こそは、出て参ります。此の家へ嫁いで来てから、わたしはただの一日でも、倅せだつた事はないのですから』

『仕方があるまい……』

『ど、どうしてですか』

『そうして、一日一日でも、親に為した不孝の罪を償うのが、せめて其女そなたのとる道ではないか』

『……………』

お市は、ちよつと青ざめた唇を、きりつと噛んで、詰め寄りながら、

『それは一体……何の……何ういう意味ですか』

『自分の胸に問え』

『父の惣七も、私の母も、実家は無事に暮しています。何が、わたくしが不孝をして、親たちを』

『やかましい』

『いいえ、いいえ』

『だまれ。惣七殿が御無事なのは、わしたち夫婦が、何事もなく、いや何の風波も無いように、世間へ見せているからではないか。

——あの好人物な惣七殿を初め——其女の一家が、わしの胸一つで、気の毒な事になると思えばこそ、わしは彼の時、何事もいわずに婚儀をしたのだ』

『そ、そんな、偽った気持——わたくしは嫌いです』

『何を云う。誰が、偽った気持など抱きたかろう。——だが、わしはお前の両親に、頼むと、手をつかれた事があつた』

『知りません。父が貴方と婚約した事すら、わたしに黙つてしたのですから』

『いや、まあ聞け。武士として、頼むと、手をつかれる程、辛い事はない。其女はいつも口癖に、わしには愛がないように申すが、それは僻ひがみというものだ。いちど自分の持った女——無智ふびんなら無智ふびんで不愆ふびんと思う——まして惣七殿が泣いて手をつかえた親心もある。きよう迄わしは、一度でも、其女を憎いとはしていない。飯め櫃しびつでも使い馴れる迄はクセのあるもの。わが妻と成しきる迄は、そのクセも抜こう、磨きもかけよう。——そう考えて努力して来

たが、その大きな愛が其方にはまだ分らぬ』

『分りました。——そうです、わたくしなどは、どうせお飯櫃ぐ

らいにしか、貴方には考えられていないのですから』

『今に分る。もつと長く長く、わしと生活くらししているうちには』

『そんな辛抱しんぼうはもう……。思うだけでも、身がふるえます』

『不幸が其女を誘惑するのだ。惣七殿の為にも、其女の為にも、

わしという者は、大樹の陰ではないか。——逃げた鷹はぜひもな

いが、不幸になる人を見のがすわけには行かぬ』

『そんな事を云つて、又わたくしの気を鈍にぶらせ、真綿で首を縊くる

ように、じりじりと、復讐しかえしなさるので御座いましょう』

『——復讐しかえし?』

『そうです！ 貴方の優しいのは、芯しんから優しいのではない。針をかくした 刺とげ 茨いばら。なぜ胸にあることを、男らしく云つて、打ぶつとも蹴るともなさないのです』

『……はははは、もう落着け、鷹も探しに行かいてもよい。よく落着いて、もういちど考え直せ』

『いいえ、嫌です、嫌です。何と云われても、もうもう私は……』
良人が冷静な眼まなざしを澄ましている程、彼女の眼は、涙に吊つり上つた。そして物狂わしく、自分の居間へ駈け戻ると、包んでおいた身のまわりの物を抱えて、玄関から外へ出て行つた。

前まへの日、一人の仲ちゆうげん間は、諫いさはや早はやの家いへに急用いそぎが起つて帰り、
勝手元たてもとにいる老婆らふだは、耳みみが遠いし、氣いきがついても、何日いっもの事ことだ

と思っているらしい。

兵庫は又、机に向い直して、筆を執りかけた。

——すると、彼女の登音が、門を踏み出したか、未だかと思われ
れるのに、

『あれッ』

と、消魂けたましい叫びが一声、そこから聞えた。

『……?』

兵庫は、執りかけた筆を擱おいて、耳を澄ましたが、ふと眉をひそめて起ち上った。

忘れぬ意趣

一

この界限かいわいの屋敷はみな小さい。

従つて、狭い小路が、幾筋も曲がつていたし、どの家も、簡素を超えて、貧しげな侍ばかり住んでいた。

今——ばたばたと夕闇を蹠よろめくように駈けて来た旅の浪人者があつた。物に衝き当つた蝙蝠こうもりのようにな、お市が、門を出て来た出会い頭がしらに、その土塀にぶつかつて、ばたつと仆たおれたかと思

うと、

『た、助けて下さい。——おすが継り申す！ ……何、何処へな、おかくま匿い願いたい』

と、彼女の裾をつかんで叫んだ。

赤土の肌の崩れている土塀には、夕顔の蔓がいちめんつるに這つて、白い花が無数に宵よいの微風に息づいていた。彼女の側にも、浪人の体にもその弱々しい蔓や白い花が、千断ちぎれて落ちた。

『あつ……？』

と、お市が身を退ひくと、若い浪人は、固くつかんでいる裾の手を、猶更かたく、

『お、お、お慈悲に——暫くの間、御門内に』

と、這つて来る。

見ると、その若い浪人の背筋は、割いた魚の背みたいに真っ赤な肉がはじけていた。仄暗いので、血とも見えない液体が、黒々とそこから満身にながれて、手をついた跡にも、血しおの手型がべつたり残っている。

——きやつと、彼女が思わず悲鳴を揚げて、門の内へ逃げこんだのは、その時だった。ウーム、ウームと、外には、氣息奄々きそくえんえんな傷負ておいの呻うめきが、不気味たかに昂たかくなっていた。

良人には、出て行くと云つて、踏み出したしきい闕しきいだし、門の外には、その不気味なものが仆れているので、お市は、そこに立ちすく恟すくんでいた。

——と。手燭の明りが映して、

『何うした？ ……』

と、兵庫の声が後うしろです。

さつきも今も、兵庫の声には、少しも変りは無かったが、お市は、未練に思われるのが口惜しかったので、

『ええ今……今行くところです』

と、云った。

兵庫は、薄く苦笑したが、門の外の呻き声に、

『やつ？ ……誰じゃ』

と、傷負ておいの影へ、手燭をかざした。

二

もう意識を失いかけて、昏倒こんとうしていた傷負ておいの若い浪人は、兵庫のことごと、手燭の明りに、又びくびくと全身の肉を痙攣ふるわせて、

『武士のお情に！ ……お、お匿かくまい下さいませ』

と、絶叫する程な力で、微かすかな声をしぼりながら、兵庫の足もとを、血しおの手で拝んだ。

兵庫は、夕顔の花より血の気のない——その浪人の顔を見て、愕然としたが、

『斬きり合あいか』

と、一言、こと訊ねた。

『そ、そうです。相手は……相手は五、六人もの人数』

『ひとりか、おん身は』

『……………』

頷くと、其儘、がくりとしかけたので、兵庫は急いで手を伸ばした。そして、傷負の体を、引っ抱えるなり、庭の奥へ、駈けこんで行った。

お市は、その隙に、もう二度と兵庫とは顔を合せない覚悟で——ついと門の外へ踏み出しかけたが、途端に、ばらばらと駈けて来た登音と共に、

『あつ、この家だつ』

『血しおがこぼれている！』

と、口々に喚いて、門の前に立ち塞がった侍たちの白刃しらはを見て、今度は、より以上、恟ぎよツと竦すくんでしまった。

『——それっ』

と、五人の中のひとりが云った。その男の白刃には、ありありと血しおが塗まみれていた。

他ほかの者も、総ぬきみて抜刀ぬきみを引ひつ提さげているのだ。どの顔も皆、眦まなじりをつりあげ、革かわ襷たすきをかけ、股もも立たちを括くくつて、尋常な血相ではなかつた。

その儘、彼等はどやどやと、門の中へ押し込んで来ようとした。すると、飛鳥のように、庭の奥から引ひつ返して来た兵庫が、

『待てつ、何処へ行くか』

と、門の口いっぱい、両手を拡げて、立ち塞がった。

『やつ？』——と、その姿に初めて、

『ここは、曾我部どのお住居すまいだったか』

と、氣着いたように、一同は、土塀の夕顔を見まわした。

『されば親代々、お扶持ふちを賜たまわつて、ここに住居しておる曾我部

兵庫。小さくとも、貧しくとも、侍の家は一城じょうかく廓かくです。誰の

ゆるしを受けてこの門内へ、踏み込もうと召されるか』

『ただ今、この内へ、傷負の浪人が逃げ込んだ筈——討たでは措

かれぬ憎しれものツくい曲まが者、お渡してください』

頬に古い大傷のある男が喚くと、それに続いて、他の侍たちも、

『年来尾け狙っていたところ、漸く、時節が参つて、この中津の御城下へ立ち入ったことを知り、唯今、笠懸かさかけ松の辻で見つけ、一太刀浴びせて、取り逃がした者でござる』

『どうか、その曲者を、突き出していただきたい』

『吾々の手に、お渡してください』

『それがお手数とあれば、われわれが勝手に引つ捕えます故、暫ざ時んじ、お住居の中を捜さがす事、御用捨にあずかりたい』

と、口々に云う声も、殺気立っていた。

兵庫は、依然として、手を広げた儘、

『いや。その儀は成らぬ。お断りする』

と、云った。

断乎とした言葉でそう答えた。

三

兵庫の一蹴しゆうに会うと、さなきだに氣負きおい立たつてゐる五名は、

『なに！ なぜ成ならぬか』

と、詰つめ寄よつた。

『何とあろうが、いちど侍ひさしの廂ひさしの下したに、助すけけてやると、抱かかえ入れ
たからには、それを渡わたしては、武士ぶしの信義しんぎに外ほかれる』

『異いなことを申まされる。あの曲まが者と、抑おさも、何なにの縁ゆかり故ゆゑがあつて、そ
のような庇かばい立たてを召まさるか』

『縁も、由縁ゆかりもない路傍の人間なればこそ、猶更のこと。各の手に、委ねるわけにはゆかぬ』

『分らぬ!』

と、頬に大傷のある男は、味方の者たちを顧みて、絶叫した。

『この曾我部兵庫どのが——あんな事を仰せられる。わし等と共に、あの曲者を、一太刀恨んでもいい人なのに!』

『きつと、われわれが何者か、この門内へ逃げた浪人が誰か、まだ何も御存知ないのだろう。格之進も変っているし、おぬしの顔も、その大傷で変っているからな』

『そうだ。名乗れ名乗れ。——そして、仔細をよく話してみろ』

顔に大傷のある男を中心に、五名の侍は、がやがや云っていた

が、やが聴て、

『あいや兵庫どの。これにおける男は、顔の大傷のため、お見違いなされたか知らぬが、以前、田丸様に若党奉公しておった楠平と申すもの。それがしは叔父の太左衛門でござる』

『てまえは、楠平の義兄の尾形周平というもの』

『拙者は、従兄弟の中根倉八』

『友人の沢井又兵衛』

と、順に名乗りかけてから、

『逃げ込んだ卑怯者は、六年前、御当所を逐ちくてん電した深見格之進でござりますぞ。楠平にとっては、云わずと知れた年来の怨み重なる奴なれど、旧主の田丸家を取つても、又、其そこもと許にとつては

猶なおのこと、捨ておかれぬ畜生ではござりませぬか。——それを匿かくまう尊公の量見が分らぬ。いぎ、お渡しください』

と、前にも増して強硬だった。

云われる迄もなく、兵庫は疾とくから知っていたので、その間も、何の表情もうごかさない。——そしてただ一言、

『いや、成らぬ。何と云われようが、武士の然ぜん諾だく、傷負ておいを渡すことは断じて相ならぬ』

と、同じ言葉を、重ねただけであった。

楠平の義兄、尾形周平は、さつきから眼を燃やして、兵庫の顔を睨ねめつけていたが、

『もう、こんな分らぬ人間に、物を云うな。云うだけ無駄だっ』

と、ののし罵つて、

『駈け落ち者の片方を、女房に持つて、何ともせぬ神経へ、われわれの武士道を、云つて聞かせても始まるまい。——この上は、刀にかけても、渡さぬというのか否か。それだけ聞こう』

と、身を開いて、ぱつと刃を構やいばえながら云い放つた。

周平が、そうしたので、他の者も、さつと身構えを変えた。当然、相手がふいに、抜打ちに来るものと計つてである。

だが兵庫は、眉も動かしてはいない。ただ微かに苦笑を唇くちもと元にながして、

『元より、刀にかけても！』

と云つた。

『——う、うぬッ』

周平が振り込んだ一薙ひとなぎは、斜めに、門の柱へ斬りこんでいた。——途端に、中へ隠れた兵庫の影の代りに、門の扉とが、風を孕はらんで、どんと閉まった。

『叔父御、背を貸せ』

と、周平は、太左衛門の背に足をかけて、直ぐ堀の内へ躍り込もうとした。

『まあ待て、まあ待て』

太左衛門は、背をかわして、彼やその他を、抱き止めながら、『理不りふじん尽に乗り越えては、兵庫めが云う通り、此方こちらの落度になり、彼奴きやつには思うつぼに箆はまるわい。忌々しいが胸を撫でて——。な、

これ……此処は胸を撫でて』

と、何か囁いた。

四名は、地だんだを踏みながら、門を睨めつけて、

『——かッ』

と、唾を吐きかけ、そして、何処ともなく立ち去った。

鷹小屋の呻き

楠平やその友達や、尾形一家の者が立ち去って行くらしい蹠音に、曾我部兵庫は、ほつとして、家の中へ這入りかけたが、ふと、暗い大地を振向いて、

『お市』

と、呼んだ。

お市は、そこに居るか居ないか分からないように門の脇に、身を沈めたまま、平たく俯^うつ伏している。

『——冷えるぞ』

それも常の声だった。

『……………』

突然、お市は、嗚咽おえつしはじめた。肩は波を打って、泣きじやくつた。

『——泣いている間に、傷負ておいはことぎれるぞ。はやく鷹小屋へ行つて手当をしてやれ』

云い捨てて、兵庫は家の中へかくれ、又、机の前に、黙然と坐つた。

——坐つたが、然し彼もさすがに、筆は持てなかつた。

地の下に、蚯蚓みみずが泣きぬいて、星の美しい夜となつた。夜となれば暑い夏も、ずっと冷々ひえびえして、人間の心からも、焦々いらいらしたものを拭ぬぐつてゆく。

『……うううむ。……ううム……』

庭の隅の鷹小屋から、時折、苦しげな太い呻うめきがながれてくる。それは、お市と兵庫の、六年間の苦しみを、一時に腕もがき苦しんでいるような呻きだった。

お市の耳へも、それは聞えてゆくに違いない。捨てて置けば、出血は止まるまいし、刻一刻と、生命いのちが縮められてゆくことも知れきつた事である。

そのうちに——がたと、裏の方で、物音がした。

兵庫は、すぐ窓を開けて、

『誰だっ』

と、咎とがめた。

『あ……吃驚びっくりいたしました。

仲間ちゅうげんの由松よしまつでございます。

諫早いさはやの病人が快よくなったので、唯今戻つて参りました』

『オ……由松か』

『御用を欠かいて、相すみませんでした』

『いい所へ戻つてくれた。早速だが、金創薬きんそうの有合せがあるか』

『ございます』

『それと、片口注かたくちへ焼酎しょうちゆうをなみなみ注いで、晒布さらしと一緒に、

鷹小屋の前へ持つて行つてやれ。——外へ置いてくればいいのだぞ、中へは這入るなよ』

『へい』

由松は、不審な顔をしながら、とにかく吩咐いらいつけられた品を揃そろえて、裏庭の奥へ運んで行つた。

そこに一棟の鷹小屋がある。

這入るなどは主人に云われたが、戸が開いて^あいるし、何やら、人の気配がするので、由松は暗い中を覗いてみた。

白い顔が、傷負の側から振向いて、あつと、軽い声を洩^もらした。由松も吃驚して、

『ヤ。御新造さまでは御座いませんか』

と、さげんだ。

お市は、手を振って、

『叱っ……静かにしておくれ』

『そこに、誰^{どなた}方か、怪我人が居らっしゃるのでございますか』

『わたしの襦^{じゆばん}袢を裂いて今、手当てしているとあります』

『晒布も、金創薬も、焼酎もここへ持って参りましたが』

『え？ 何うして』

『旦那様のおいっけで……』

『……あ。……そう』

凝と、首をたれて、お市は俯向きこんでいたが、もう女の特有な度胸がすっかりすわったように、言葉のふるえも消えて、

『ここへ持って来ておくれ』

『へ、へい……。けれど、旦那様が、中へは這入るなど仰っしや
いましたか』

『かまいません』

『では——』

『それから、夜半よなかになったら、済まないけれど、駕かごを二挺ちよう、そつと裏口の木戸へ呼んで来ておくれでないか』

『かしこ畏まりました』

『竹筒に水を入れて、駕へ括くつておいておくれ。それから中に、油単ゆたんや小蒲団をかさねておくようにね』

『では、その怪我人のお方を』

『別府の温泉ゆまで、療治りようじにお連れするんです』

『旦那さまのお耳へは』

『何もかも御存じなのだから、云うには及びません。——もうすぐにお寝みになるだろうし』

『……ほんに』と、由松は庭木を透かして、

『いつのまにか、お部屋の明りが消えております』

『じゃあ、今のうちに、はやく駕を頼んでおいておくれ。間際にまぎわ

なつて、無いと困りますから』

由松は、何処かへ、出て行つた。

二

もう九刻このつ（十二時）過ぎ——

海騒もない、静かな夜半よなかだった。

沖の水平線だけが、月光色の帯のように、きらきら明るかった。

『御新造さま。……参りました』

『駕？』

『へい』

『旦那さまは』

『あれなり、ずっと、お寝みのようでございますが』

『……じゃあ、ちよつと、手をかしておくれ。……そつと、そつと抱いて上げない』

『かなり深傷ふかの御様子でございますな』

『でも、すつかり洗つて晒布卷さらしまきをしましたから、だいぶお顔よが快よくなつて来ました』

由松は、何気なく、傷負ておいを抱き起して、自分の肩に負いかけたが、ふとその浪人の顔を見て――

『あつ、この男は』

と、思わず口走つた。

お市は、顔を反^{そむ}向けながら、

『お前も、この人の顔を、見知っているのかえ』

『知……知らねえで、何としましょう。……御新造さま！ お、

おまえ様というお方はなあ……』

『もう、何も云つておくれでない』

『——云いますめえ、追^{おっ}つかねえことだ』

由松は、肱^{ひじ}を曲げて、顔の涙をこすりながら、傷^{ておい}負を肩に、と

ぼとぼと歩きだした。

『……ア、由松や。表門ではなるまい。駕は裏の木戸へ来ている

のでしょう』

『うんにや』——と由松は首を振って、

『宵から、裏の浜辺に、不審おかしな人影が、張番みてえに立っているので、わざと、表へ廻しておきましただが』

『えっ、外に誰か、立っているって？』

『仕方がござりますめえ。この塀の中にいれば、誰にも、指一つ触らせる旦那様ではねえのに……おまえ様が好んで出て行かっしやる地獄の道だに』

『……いいよ！ ……もうわたしは、覚悟をしているのだから』

門の前には、駕が二つ、忍びやかに待っていた。それも由松の
気くばりとみえて、
提ちようちん燈ちんには、黒い布ぬのが巻いてあつた。

傷負は、そつと、一挺の内へ寝かされた。由松は、鼻をすすつて、地を見つめていたが、

『さ、御新造も、はやく……』

と、人目を惧おそれて促うながした。

『ありがとうよ——』

彼女は、奉公人へ対しても、初めて、心からそんな礼を云つた。そして、

『もういいから、中へ這入つておくれ』

と、云つた。

由松が中へ姿をかくして、門の扉とを閉めても、彼女はまだ、六年住んだ家の屋根や廂ひさしや樹を見まわしていた。そして、駕屋の眼

にも触れないように、門の土塀に這っている夕顔の蔓を、そつと千断ちぎつて、袂へ入れた。

『駕屋さん——やってく下さい。一挺は病人ですから、揺れないように』

駕は、傷負いたわを舐なりながら——でも軽い弾はずみをつけながら——駈け出した。

お市は、駕の中から、もういちど、草だらけなわが家の門を振り向いた。

蔓草つるくさの道

中津の城下から南へ向つて、道が町屋から離れると間もなく、嫌いやでも応でも、浜辺の並木へかかるしかなかつた。

『待てーッ』

いきなり横合の樹陰こかげから跳び出した人影がある。しや嘎がれ声ですぐ老人であることは分つたが、手には、槍を引つ提さげ、袴はかまを高たかく括くくし上げて、まるで夜叉やしやのような権けんまくだつた。

『お市！ これへ出ろつ。他人手ひとでを待つまでもない、肉親の父惣

七が成敗してやる。——出ろつ、出ろつ。その後で、不義者の相手も刺止とどめを刺してくるから』

惣七の後ろには、宵の五名も、その儘のすがたで、ずらりと立ち並ならんでいた。

もう霜になったびんの毛を顫ふるわせて、惣七は、

『ようも家名を汚けがし、良人の顔に泥をぬりおつたの。——うぬ、出てうせねば!』

槍を繰り引いて、垂れ籠めている駕の内へ、ずばつと突き入れようとした時、並木の陰から、閃ひらつと迅い人影が、彼の側へ跳んで槍の手元をつかんだ。

『御老台ごろうだい。あなた迄が、何をなさる』

『あつ——お身は兵庫どの』

『あなたに、こんな事をさせる程なら、拙者も永い忍苦にんくはしませぬ。こうした事の生れる初めに、あなたも父として何も落度はなかつたか、拙者も良人として足らぬ所はなかつたか。それも考え
てみなければなりませんまい』

『ない、わしに落度はない。町人なら知らぬ事、武士の娘に——
又武士の間に、そんな斟しん酌しゃくはないことじゃ』

『武士。——仰せられたその武士へ、では何で、お市を嫁がせる
前にあなたは、頼む！ と拙者に手をついたか』

『……む？』

『武士には、一諾だくを重んじるといふ事がござりますぞ。事情を打

明けて、この娘、頼むと仰せられたあの涙を、なぜ今お持ちなさ
らぬのか。よろしいお娶もらい申そうと、その時云つた然ぜん諾だくを、拙
者はまだ、胸から捨ててはおりませぬ』

『……………』

『いや一諾の、信義のと、肩かたひじ肱張ひはつた理窟りくつばかりではない。瑕きず
のある玉も、身に帯び馴れば捨て難かねる。ましてや何いれに動くも
ただ感情に動く女、無智なれば無智なほど不愆ふびんにも存じて——今
日までは何とかして、あなたに与えた然諾を、裏切るまいと努め
て来たのに』

『もう、仰せられな。——勿体ない、勿体ない。そう云われては、
この惣七、何どう詫わびてよいやら、途方にくれる』

『お詫びは、今も申した通り、兵庫からせねばなりません。折角の一諾も、お引き請け効がいもなくして』

『な、なんの。——お身から詫び言など』

『この上は、お慈悲です。二人の然諾も、恨みも解いて、この駕を、行きたい道へやって下さい。——それが縁あつて一時良人と侍かしずかれたそれがしが、お市への唯一つの餞せんべつ別』

『いや、わしの一量見にはゆかぬ。あれに居らるる五人の衆の心も訊きかねば』

惣七は、親心に、もう槍の向け場を失っていた。

兵庫は慇懃いんぎんに、五名の影に向つて、

『この通りお願いしまする』

と、云った。

そして又、

『その中に、楠平どのは居るか』

と、訊ねた。

二

『はい、これに居りまする』

と、楠平は一足前へ出て云った。

『おぬしが受けただけの傷は、いやもつと心にまで深く、格之進に与えたではないか。その上、刺止とどめまで刺すのは武士の情ではな

い。——のみならず、それでは、旧主の惣七どのを、是が非でも、わが娘こを成敗せねばならぬ破目はめに立たせてしまふ』

『……分りました。貴方のお言葉で、小さい意地や男の体面のほかに真まことの武士道とは、大きな而しかも優しい愛のあるものだと分りました。——もう何事もわすれます。どうぞその駕、お通しく下さいませ』

『かたじけない』

兵庫は、それを惣七に伝えるつもりで、駕のそばへ戻つて来たが、ふと見ると、お市の乗っている底から、血しおのながれが、無数に地を走っていた。

『しまった!』

兵庫は、駈け寄るなり、駕のたれを刎ね上げたが、もう間にあ
 わなかつた。吾儘わがままで、容易に意志を曲げない女だけに——自らみずか
 喉を突いた短い刃やいばも、襟へ抜けるほど深く貫いていた。

そして膝には、夕顔の蔓つるに、まだ萎しおれていない二、三輪の白い
 花が乗っていた。

『……兵庫どの。娘はやはり武士の娘に違いはなかつたのじゃ。
 わしが悪かつたかも知れぬ。いや悪かつた、悪かつた。……ゆる
 して下され』

大地へ手をつかえた惣七は、恠こらえる嗚咽を、脆もろくも老おいの肩骨に
 ふるわせて、いつ迄、顔を上げ得なかつた。

『——それ』

と、眼くばせ交すと、楠平を初め五名の者は、すぐもう一つの駕を取巻いて、中を覗いたが、その格之進は自刃もしていなかった。

——すでに、ここ迄来る途中で、彼の生命は終っていたからである。

(昭和十三年六月)

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「婦人倶楽部 臨時増刊」大日本雄弁会講談社

1938（昭和13）年6月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

夕顔の門

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>